

Title	巻頭言 教育における相対的価値基準の根本問題
Author(s)	阿久戸, 光晴
Citation	聖学院大学総合研究所紀要, No.39, 2007.9 : 3-6
URL	http://serve.seigakuin-univ.ac.jp/reps/modules/xoonips/detail.php?item_id=4005
Rights	

SERVE

聖学院学術情報発信システム : SERVE

SEigakuin Repository and academic archiVE

巻頭言 教育における相対的価値基準の根本問題

聖学院大学総合研究所副所長
聖学院大学学長

阿久戸 光晴

現代日本社会における日常活動を支えるべき人々に信じられないような初歩的なミスが相次いでいる。そこから重大な事故につながり、惨状を露呈する場合も少なくない。そのほとんどが任務を託された人の不注意、集中力の不足から来ている。なぜ勤労精神にこのような病状が生じているか、経済団体からも教育界に警鐘が鳴らされている。初等教育段階から高等教育段階まで「気合を入れた」取組みが急務であるという。しかし問題はそう単純ではない。

日本の教育制度上、偏差値・ヒストグラムが採り入れられたのは、一九七〇年代である。青少年の学力評価の便益を考えてこれらの指標が入ってきた。偏差値は、ある数値が**母集団**の中でどれくらいの位置にいるかを表した無次元数である。そのデータに応じてさらに柱状グラフをとり、層別管理をしていくものである。しかしこの前提に**母集団**とは何かが問われねばならない。それは、ある地域（日本の特定地域）における、ある年代の、ある同じ世代の、ある限られた構成集団に他ならない。したがってある若人が同じ学習姿勢により同じ学習達成度を示したとしても、母集団が異なれば当然

ながらまったく異なるデータが出るわけである。それはあくまで相対的評価に過ぎないのであるが、各学校から出されてくる偏差値データはあたかも絶対的通用力を持つかのように、一般に受け止められる。ここから次のようなモラル・ハザードが起こってくる。

第一に、本来相対的評価である偏差値が士農工商的な序列で見る人間観を生むことである。人間にレッテルを貼り、硬直化しやすい層別管理で「教育」しようとするのである。一方レッテルを貼られたと信じる構成員間に相互蔑視が生まれ、また自己蔑視が起きやすい風土が生まれるのである。当然ながらモチベーションは大きく低下する。それはまさに管理社会における人間疎外の病理に他ならない。

第二に、偏差値が母集団における相対的評価であることから、母集団の各構成員が自己努力よりも他の構成員の怠慢を望み、さらに母集団全体のモラル低下、レベル低下をひそかにあるいは公然と望む体質が生まれやすいのである。なぜなら母集団全体がいわばあらゆる意味における精鋭集団であれば、各人のハードルが高くなり、競争が悪い意味でも良い意味でも激化しやすいのであり、それなら母集団はもとより日本全国のモラルが低下してくれた方が頭角を現しやすいためである。

この第二の問題に気づいておられるひとりが内田樹（たつる）氏である。氏の『下流志向』（講談社、二〇〇七年）は鋭くこの点を衝いている。氏によれば、偏差値は本来母集団の自分の位置確認（ここでも位置とは何かが問われるべきなのであるが）であり、構成員が切磋琢磨しやすいものとすること、教育者が学習到達度の把握をしやすくし、教育効果を上げるためのものであったはずであったが、逆に学ぶ者のモラル低下という、逆噴射としてのまさにモラル・ハザードが起きてしまったのである。

しかし氏の指摘を超えてこの問題の根は深い。それは価値相対主義の問題である。戦前においては、天皇制・儒教的世界観・富国強兵的国家主義が擬似絶対基準となり、立身出世主義の精神ともあいまつて、それなりに構成員の向上心やモラルアップを生んでいた。しかし敗戦後そうした擬似絶対主義的価値基準は倒壊した。そこでマイホーム主義に類する閉鎖的小集団において通用する価値が主流となった。それはその集団においてのみ通用するという意味において相対主義的価値基準に基づく。それこそ日本の偏差値の根底にあるものである。しかもバブル経済崩壊後、高学歴志向に基づく大学全入化などにより、学習努力に投じる精力のコストほど「立身出世」は望めないとすれば、何が起ころか。競争社会の強者に権限濫用が起これると同時に、強者以外の者にモラルの逆噴射が始まる。なぜなら相対主義的価値観とは、以前指摘したように、神々を相対化する自己を絶対化する、多神教的自己絶対化であるからである。

ところで閉鎖的母集団の他の構成員がどうであれ、自己に厳しいハードル(目標)を課し、社会貢献のための克己的向上を目指すエリートスはどのようにして獲得されるのだろうか。初歩的ミスなど起き得ないような、喜びと誇りをもった責任的労働はどのようにして回復されるのだろうか。まず歴史退行的解決策は成り立ち得ないし、そもそも解決にならない。なぜなら、かつての民族国家主義的価値体系自体、国際通用力を欠くやや大きな「母集団」に他ならないからである。我々が絶対的価値基準を探究する場合、論理必然的に歴史的普遍性を問うのである。それは単なる普遍性でなく、歴史において全貌を顕していく歴史的普遍性である。歴史的に現れ出てくる人格や人権、デモクラシー、福祉などの価値物をもとに、引き出されていく価値基準である。その意味で、万人に普遍的に通用する価値基準をもとに、固有のオンラインワンにして普遍的価値観が内的にしつかり刻み込まれた各人がそ

の価値基準から示される目標を高く掲げて、それに向かって自発的に向上していくことは、経済界に求められるまでもなく現代社会の急務である。それは正に教育界の急務でもあるといつてよい。教育者との真理の協働的追究の中で、各人に内的照明がもたらされ、堅固な高い価値基準が形作られていき、各人が他者に奉仕する喜びを知る「人格の完成」（原教育基本法第一条の言葉。現教育基本法では「個人の価値」や「自主的精神」の語が削除されるなど異質の意となつた）へと目指す歩みの現出こそ、今日の究極課題の一つであらう。